

二〇三三年二月三日

見上げればみ空も雲も春めきぬ

千鶴

参道を突然塞きししづり雪

せいじ

寒晴や肺軋むほど深呼吸

ひのと

廊下にも一つ置かれし火鉢かな

こすもす

立春や気分変へんと髪を切る

千鶴

二〇三三年二月二日

白椿逆縁の子の忌を修す

董雨

冬麗のテラスに母の髪を切る

智恵子

進む水脈不即不離なる番鴨

素秀

股座に猫の居座る寒の朝

澄子

面とりて泣く児に詫びる追儼鬼

なつき

二〇三三年二月一日

襟巻きに頬埋め繰る単語帳

かえる

寒灯下古書肆の棚のゆるびなく

なつき

下萌に弾む感触土踏まず

みきお

学窓へ振り返す手や春隣

みきえ

山門の裏に積まれし雪の山

あひる

二〇三三年一月三二日

しづり雪茶店の客の総立ちす

あひる

漁師らの団居の背へ風花す

ひのと

冬風の湾なぞりゆく鉄路かな

素秀

商談が釣りの話へ日脚伸ぶ

ひのと

二〇三三年一月三〇日

真つ新たな教科書にほふ春隣

ひのと

風邪の手の影絵遊びに付き合ひぬ

ひのと

堂寒し青筋立てて憤怒像

もとこ

酒蔵に弾みし声や杜氏来る

あひる

リヤカーを揺すりて払ふどんどの火

なつき

駅頭の市旗ぼろぼろや北おろし

たか子

湧き水のほとばしる郷寒造

あひる

二〇三三年一月二九日

縮れたる冬菜のひだに土匂ふ

たか子

氷嚢を替へて風邪の子また睡る

ひのと

流木の潮噴き燻る浜焚火

素秀

二〇三三年一月二八日

堅雪を踏んで喧嘩の帰り道

ひのと

冬麗の峰高く鳴る鳶の笛

せいじ

苗札を埋めてしまひ庭の雪

うつき

寒暁に響く始発の発車ベル

豊実

陽だまりに椅子置く寒の弾語り

なつき

薄墨に滲みて東山眠る

もとこ

荒れ浜の廃船照らす寒の月

愛正

毎日句会みのる選・二〇三三年二月五日